

# 茶の湯文化学会会報 No.57

第57号 / 2008年6月30日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 第二十五回研究会報告

影山純夫

第二十五回研究会を二〇〇八年二月二日・三日の両日鹿兒島市で開催した。二日は鹿兒島大学での研究発表、三日は鹿兒島市内での関係施設の見学を行った。

二日は、会長の挨拶ののち鹿兒島大学の高津孝教授の「薩琉関係史と茶の湯」の研究発表と鹿兒島大学の渡辺芳郎教授の「茶の湯と薩摩焼―考古学から見た初期薩摩焼の茶道具」と題する講演があった。

高津氏はまず鹿兒島県の茶生産について現在全国二位にまで生産が伸びていること、現在ブランド化が課題となっていることを紹介された。続いて薩摩略史を簡単に述べたあと琉球と茶の湯について述べられた。すでに室町時代に日本禅僧芥隠の来琉があり多くの禅寺がありそこでは茶が供されていたが、桃山時代に千利休の弟子喜安蕃元が茶道をもって尚王朝に仕え茶の湯が王府の儀礼となったとされた。十七世紀の後半には摂政の羽地朝秀が、行き詰まりを見せていた社会の転換を図るため大和芸能を奨励し、その後琉球士族の上流文化として茶の湯が沖縄本島に止まらず先島にまで広まったことは、文献や遺品によって確認できるとされ、島津義弘への利休の書とされる「維新様より利休江御尋之條書」も琉球の王族護得久（ごえく）家に

伝わったことにふれられた。茶道史において視野に入りにくい琉球の茶の湯の再認識を求める研究発表であった。

渡辺氏は、薩摩焼について豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に島津義弘によって連れてこられた朝鮮陶工により始まり、近世島津領で生産された陶磁器を近世薩摩焼と総称すると定義された。その中には堅野系、苗代川系、龍門司系、元立院系、平佐系、能野系があり、その内平佐系は磁器生産を行い、種子島の能野系は焼く陶器を生産していたと説明された。初期薩摩焼窯における茶道具の話に移り、始良町の宇都窯跡からは窯体が発見されており、白色素地の付け高台の碗や付け底の茶入が発掘されているが、金海（星山仲次）が開いたという説があるものの朝鮮窯系か、伝統的陶器窯系かはまだ明確ではないとされた。加治木町の御里窯跡からは多くの茶入の陶片や矢筈口水指の陶片が見つかっているが、窯体は発見されていないとの説明のあと、御里窯の茶入を、付け底で厚手、かつ左系切りのI類と、轆轤水挽き成形で薄手、右系切りのII類に分けられ、I類は朝鮮半島の甕器系技術をもとに瀬戸美濃系の轆轤成形の技術を取り込んで生産されたものであるとし、

Ⅱ類は瀬戸美濃系の技術を基本として生まれ  
たのではないかとされた。Ⅰ類の茶入の中に  
内側に糸切りが残る物があることから、Ⅰ類  
茶入の製作工程の試案を示されたが、説得力  
のある試案だったように思われる。日置市の  
堂平窯については十七世紀の操業が考えられ、  
朝鮮半島の甕器系技術を基礎に発展し、のち  
白薩摩や堅野系の技術の流入があったのでは  
ないかとされた。薩摩焼の地元の研究者によ  
るものだけに刺激的な講演であった。

研究発表後、天文館近くの郷土料理店で懇  
親会を持った。楽しいひとときであった。



谷会長の挨拶



(午前の部)

### 研究発表

「『君台観左右帳記』の熊(能)皮蓋は、カ  
メ(玳瑁)か?クマか?」

岩田澄子

典型的な吉州窯製天目茶碗の特徴は、茶碗  
外側の亀甲斑文様、内側の花鳥などを配した

三日は、高津教授の案内で、まず鹿児島県  
立歴史資料センター黎明館で鹿児島に関する  
歴史展示、薩摩焼関係の展示を見学した。そ  
の後城山に登り錦江湾を遠望したが、折良く  
桜島の噴火に遭遇した。高く黒い噴煙を噴き  
上げる桜島は、鹿児島の人々に力を与えるも  
のでもあることを実感することができた。続  
いて磯庭園に移動し、反射炉の跡、島津家別  
邸の内部、尚古集成館を見学した。小雨のぱ  
らつく天候ではあったが、梅や緋寒桜が盛り  
で満足のいく見学会であった。なお、今回の  
研究会は発表から懇親会、見学に至るまで全  
て高津教授のお世話によるものであった。厚  
くお礼申し上げたい。

### 理事会

平成十九年度第四回理事会が、三月十六日  
(日)午後二時から京大会館で開催された。

谷会長の挨拶のあと、神谷副会長の司会で  
議事が進められ、まず各担当理事より平成十  
九年度の事業内容の報告があり、それらの決  
算については神谷副会長から報告があった。  
いずれの内容も理事会で確認された。次に平  
成二十年度の事業案について、各担当理事よ

### 大会

り提案があり、大会、各地例会、会報、会誌  
の各事業について一応の承認を得た。研究会  
については、第二十六回の予定案が高橋副会  
長から提案され、九月四日〜八日の日程でベ  
トナム開催案が承認された。また第二十七回  
研究会については影山副会長から提案があり、  
来年一月か二月に彦根での開催を計画してい  
る旨、承認された。

その後いくつかの当面の課題について議論  
がなされ、経費節減の具体策、会長選考の内  
規、会員の増強などの諸問題について、提案、  
討議がなされた。すぐにでも取り組める案に  
ついては、時を経ず実行していくことで一致  
した。最後に、谷会長より、林屋晴三氏を名  
誉会員に推薦することが提案され、了承され  
た。

平成二十年年度茶の湯文化学会大会は、六月  
十四日(土)東京四谷の主婦会館プラザエフ  
で開催された。谷会長の開会挨拶の後、午前  
三題、午後二題の研究発表があり、その後、  
二時間半にわたってシンポジウムが行われた。  
以下にその概要を記すが、研究発表とシンポ

ジウムについては、『茶の湯文化学』に詳報  
が載る予定なので、詳しくはそれをご覧いた  
だきたい。

紋様、高台が非常に低いことである。『君台  
観左右帳記ぐんだいかんそうちようき』は、  
能阿弥や相阿弥が作成した室町時代中期の座  
敷飾りに関する秘伝書で、吉州窯製は、鼈蓋  
(べっさん)と熊(能)皮蓋の二種類である  
(注：『君台観』写本では能が多いが、熊は  
能とも書かれる『熊或作能』集韻：宋代の  
字書)。

しかし、十六世紀中頃から始まる茶の湯資  
料や伝世品の名称をみると、タイヒサン(大  
皮山、玳皮蓋)はあるが、鼈蓋や熊(能)皮  
蓋はほとんど見当たらない。そこで、鼈甲斑  
を連想させる鼈蓋は、後に玳皮蓋(たいひさん  
(玳瑁(たいまい)は鼈甲カメ)と呼ばれたも  
のと思われる。では、鼈蓋(千足Ⅱ高価な品  
と区別された熊(能)皮蓋(代やすし)は、  
どのような茶碗だったのか。

◎カメ説：現在、熊(能)皮蓋はタイヒサン  
Ⅱ玳皮蓋と解釈するのが常識である。つまり  
鼈蓋と同じもので、吉州窯製には特段の区別  
はないという。しかし、能阿弥は茶碗をイメー  
ジで分けているのに、同じ鼈甲カメを二つ並  
べたのか、という素朴な疑問が残る。

◎クマ説：十八世紀初頭、黄檗宗とともに大  
量に流入した中国資料を参照して書かれた茶

書『茶教字実方鑑』(一七二七)・『和漢茶  
誌』(一七二八)は、カメ類とクマを区別。  
熊皮蓋は鳥蓋の一種という。熊皮蓋の発音は、  
ヨウヒサン、ユウヒサン、イヨウヒサン等。

『天目』図録(昭和五十四年・徳川美術館・  
根津美術館)で二十五種類の吉州窯製が紹介  
された中に、曜陽蓋(ヨウヒサン)の箱書が  
あるものがあつた(図録番号七九)。曜陽蓋  
は『万宝全書』(一六九四)で「黒薬丸紋、  
こぼれ梅等あり」とされ、熊皮蓋の発音に別  
の漢字が当てられたクマ説由来の命名と思わ  
れる。鼈甲斑がほとんどなく、高台が高く、  
釉薬の範囲・内側図柄の種類も、いわゆる典  
型的な吉州窯製と異なる。二十五種(五七〜  
八二)のうち、分類番号が連続している種(七  
七〜八一)が同様の特徴を有していた。

吉州窯製発掘結果を基にした釉薬実験では、  
茶碗外側の鼈甲斑文様と内側の花鳥紋等の再  
現は比較的容易で、同時に決定できるという。  
一つの仮説として、切り紙の図柄によって格  
の高低があり、それが鼈甲斑の有無と関連し  
た可能性が考えられる。曜陽蓋のような非典  
型的な吉州窯製は、カメ説では説明が困難と  
思われる。むしろ、それは鳥蓋の一種だとす  
るクマ説の方が、よりスムーズに現状を説明

できるのではないか。今後、吉州窯製の考察には、クマ説も選択肢に入れることを提案する。

### 「茶研究の先駆者・諸岡存の生涯と茶業文庫について」

岩間眞知子

諸岡存（もろおか たもつ 一八七九—一九四六）は、『茶経評釋』など二十数点の書物を著し、日本の茶研究の黎明期に、茶の薬効と『茶経』研究に優れた業績をあげた。また精神科医として九州大学で教鞭を取り、高村光太郎の妻・智恵子の診療にも当たった人物である。

二〇〇六年秋、ご遺族のところで、膨大な量の諸岡の遺稿を拝見した。ダンボール箱十数箇に入った遺稿は、漢籍資料の抜粋など殆どが手書きの原稿用紙であった。戦中の多難な、コピーもパソコンもない時代に、どれ程の困難を乗り越えてあれだけの業績を残したのか、またご家族がいかに敬愛に満ちた協力をされたのが偲ばれた。そこで今回、彼の生涯を振り返り、業績の今日的意味を考察したい。

諸岡存は、明治十二（一八七九）年五月二

表を行っている。しかし、資料上の制約もあり、個別事例を比較検討する段階にまで達していないのが現状である。

本発表では、丹波国篠山藩の藩政資料『日記』（篠山市所蔵青山家文書）を使用し、化政期以後の茶道頭を中心とした御茶道方の役割を検討したい。また、これとあわせて、藩主御成りの際に女性による煎茶給仕が行なわれた事例を紹介し、その意味付けを試みたい。

篠山藩は、五万石の譜代藩で、寛延元年（一七四八）に青山家が入部した。青山家は代々幕府の要職を務めたが、在府期間が長く、藩主不在の国許では三名の家老による合議制、先例主義に基づく官僚政治が行われた。茶道組織は「御茶道方」と呼ばれており、二、三名の「茶道頭」の下に「茶道頭助」「茶道」「茶道坊主」が属していた。茶道頭は給人格、十徳着用で「奥御取締り」を兼任しており、配下には絵師や儒者、医師等がいた。江戸の藩邸とは御茶道方が年単位で数人ずつ入れ替わる交代勤務であった。

茶道頭は点茶業務だけではなく、酒飯を伴う儀式的折には給仕を行なう坊主の差配を行い、儀礼進行上で重要な役割を果している。また、篠山藩の鎮守社祭祀には藩主の名代で

十五日、佐賀の土族・諸岡準之助、スミの長男として生まれた。父親の仕事で長崎に行き、大浦居留地の尋常小学校を卒業し、ミッションスクール東山学院で英語の学習に専念する。米国人宣教師と起居を共にして英語を習得する一方、日中の親善こそ日本の使命と信じ、小学校以来漢籍の勉強も怠らなかつた。東京の京北中学・鹿児島第七高等学校を経て、九州帝国大学医科大学を卒業する。二年の英国留学を経て、九州帝国大学助教となる。留学中、イギリス人が朝夕多量に茶を飲み、薬局で茶素（カフェイン）を脳の主要薬剤として売っていることに衝撃を受ける。そして英国の文明を育てたのは、実は中国産の茶ではなかつたかと思いついたのである。昭和二年十二月末、九州帝国大学医学部助教を辞し、東京に出る。

東京で駒澤大学教授となり、また茶業組合中央会議所の顧問として茶の研究と茶関係書物の収集を行う。昭和五年刊行の小冊子「喫茶新養生記」が大好評を博し、以後次々に茶に関する著作を刊行、昭和十六年には大著『茶経評釋』の成果を生む。

諸岡の著書に見る茶の研究領域は、多岐にわたる。近代西歐的な医科学から中国伝統医

出席するなど、藩政上で儀礼化した行事では常に重要な任務を担っている。

このように御茶道方による給仕業務は職掌として固定化しており、藩政上の式典行事と茶道・抹茶は切り離せない関係にあったことが確認できる。しかし、その一方で、藩政日記上で女性による煎茶給仕の事例も確認できる。藩主が家老宅を訪問する御成りでは、家老の妻たちが煎茶の給仕を行なっている。御成りは表向きの行事ではなく、私的外出にあたるが、武家儀礼としての形式に則った行事である。城内の正式行事においては、御茶道方による抹茶の点茶が固定化しており、煎茶の導入は不可能であるが、御成りにおいては抹茶の点茶に代わって女性による煎茶給仕が可能であったことが理解できる。

（午後部）

### 総会

総会は、竹内理事の司会により、午後一時より始まった。まず議長団の選出に入り、矢野理事と中村（修也）理事が推薦され、全会で承認された。その後この両氏議長により議

学、またイギリス・中国・チベット・蒙古・朝鮮そして日本に及び、さらに当時の中国や韓国での実地調査報告も収める。著書に提示された詳細豊富な漢籍資料や調査報告、モンゴルやチベットも含む広い視野は、これからは茶の歴史を考察していく上で欠かせないのではないだろうか。

茶業文庫は、現在、新橋の日本茶業中央会にあり、もともと茶業組合中央会議所が中心となり、諸岡も収集に関与した蔵書である。茶関係の書物が一所にまとまり、貴重な書物も含まれるため、今後の茶研究のために紹介したい。

### 「篠山藩・藩政日記にみる茶道頭の役割と煎茶の導入」

橋倫子

近世の武家茶道については、大名茶人の個別研究、ならびに幕府・諸藩の茶道役を中心とした茶道組織の個別研究を積み重ねることによって、ある一定の普遍性と個々の特殊性を解明するという方向で研究が進んできた。先行研究には、桑田忠親氏や谷端昭夫氏の研究があり、近いところでは昨年の近畿例会において、岡宏憲氏が鳥取藩茶道役に関する発

事が進行され、まず平成十九年度事業報告および決算報告が神谷副会長（会務担当）よりなされ、これに対する監査報告が中村議長により代読された。次に平成二十年度事業案と予算案が神谷副会長（会務担当）より提案され、これも全会で了承された。その他、質問や異議はなく、総会は終了した。

### 研究発表

#### 「茶の湯の釜の煮え音についての一考察」

岡本文音

利休の高弟であった山上宗二は、『山上宗二記』において、「第一雪之内ニハ有二炉中楽ミ一、御釜ノニエ音ハ松風ヲソネムニ春夏秋共ニ面白キ御遊興是也」と、能阿弥の言葉として述べており、釜の湯の煮え音を茶の湯の愉しみの眼目としている。

正保年間（一六四四—一六四八）に成立したと考えられている、和泉流狂言台本『狂言六義』（天理本）の「飛越しんほち」に、「ぎう／＼車せい、ゑんらうぶあん」と、茶の湯の釜の煮え音に四音あることが記されている。また、表千家五代家元随流齋が享徳三年（一六八六）ころに著した伝書『随流齋延紙ノ書』

において「茶六調子」として「潤水、岸波、遠波、魚眼、眼トモ、松風、深淵」と記されている。元禄三年（一六九〇）年成立の『南方録』では、「ソモく茶ノ湯ト云名ハ何ノ爲ニツケ候ヤ、茶ト湯ノ相應第一ナリ」と、火相と湯相による茶と湯の相応が第一であるからこそ、「茶ノ湯」という名がつけられたと主張され、季節によって状態の違う茶に合わせて、火相と湯相を相当して茶を点てることの重要性和、湯相には「五音ノ湯アヒ」と、五段階の釜の湯の煮え音があることが述べられている。

狂言の台詞に用いられ、茶書に秘伝として書き残されているところから、茶の湯の釜の煮え音を段階に分け、それぞれに名称をつけることは、その当時の茶の湯を愛好し実践する人々にとって重要なことであり、かつまた、一般にも知られていたことであると考えられる。

本発表の試みは、古来、どのように茶の湯の釜の煮え音が聴かれ、そして表現されてきたのかを検証し、かつ、茶の湯を愛好し実践してきた人々にとって、釜の湯の煮え音はどのような存在であったのかを考察することである。

「茶道史における幕末明治期の位置付け  
—伊勢国松坂・本居信郷の史料を中心として—」

市村祐子

伊勢国の茶の湯については、平成十四年に裏千家茶道資料館が開催した春季特別展「近代茶道への軌跡 裏千家十一代玄々斎宗室を中心」の図録所収の筒井絃一氏「玄々斎宗室の生涯」、戸田勝久氏「玄々斎と松阪の社中—長井同玄斎、小津、長谷川、三井などの諸家—」に詳しく、上野利一著『幕末維新期伊勢商人の文化史的研究』（多賀出版 平成十三年二月二十八日発行）では射和の竹川竹斎を含めた伊勢商人について、松阪大学で行われた調査・研究について紹介をされている。

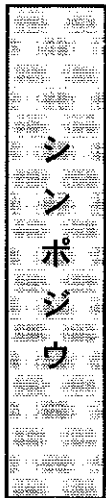
本発表で取り上げる本居信郷（通称健亭、九兵衛。号宗朝・古好斎。文政八〜明治三十三年 一八二五〜一九〇〇）は本居家四代当主である。『本居宣長事典』（本居宣長記念館編 平成十三年発行）によると信郷は四日市の高尾家に生まれ、十八歳の時に上京し表千家堀内宗完に茶道を習い、嘉永六（一八五三）年に本居家を継いだ。松坂国学所教導後には百枝神社祠掌となり、以後、神職の傍ら

茶道を指導。茶道関係については茶会記『会席附』五冊（安政四年から明治十八年）、自作の茶道具と、吉田悦之氏が述べられている。今回は『会席附』を中心として、茶道史上、幕末明治期を「前近代」、「近代以前の茶」として位置付けたい。

『会席附』には全三八九会が記録をされており、内訳は自会記六回、他会記三八三回である。他会記の中には信郷が宗匠や茶友から会記を送付してもらい、書写をした会も含まれている。同館には千宗左書翰及び会記四十七種他が現存する。流派を問わず会記を収集して記述し、参会をした場合は道具等の略図も描いている記事もあり、巻六は特に詳細な図がある。ここからは信郷の旺盛な向学心と関心を窺うことが出来る。信郷が客として参会した茶会は表千家・裏千家・藪内家、参会者と亭主は伊勢・江戸・信州・京・大坂・阿波・長州と多岐に亘り、彼らの身分は公家（南部一乗院他）・武家（徳川家）、商家（小津家、三井家、長井家他）と多彩であり、信郷の交友の広さがわかる。茶会の種類は献茶、祝茶十四会（長寿—還暦・古稀、皆伝他）、追慕茶会一九会（茶匠、家族、茶友）、稽古茶事、順茶等がある。明治十一（一八七八）

年九月一条には、千宗左が教授を務めていた「西京土手町女学校遷移式」において生徒三名（榎本とき、塚本のぶ、清水てい）が點茶の亭主をつとめている記事もある。

信郷は茶室設計や茶道具の制作も行っており、幕末明治期の松坂地域における茶道指導の牽引的な役割を果たしていたと考えられ、多数の流派との活発な交流や交友関係からは、神職としても伝統文化が否定された明治時代を如何に乗り切ろうかと思案を巡らしていたのではないかと推測する。かかることにより、当時期を茶道史上、「近代以前」又は「前近代」と位置付けるものである。



「江戸・東京の茶の湯を考える」

小堀宗実氏  
川上紹雪氏  
森田晃一氏  
田中秀隆氏

（小堀）

茶の湯は人と人との交流が大事である。小堀遠州は、動乱と安定を知っている茶人であり、京都の伏見奉行として京都の文化を熟知

し、江戸文化に種を蒔いた人と言えよう。また気配りの利く人物でもあった。



左から 小堀氏、川上氏、森田氏、田中氏

（川上）

川上不白の生涯は、大きく三期に分けることができる。不白は、本家はあくまでも千家であり、「江戸預かり」という立場に徹した人であった。現在でもその考えが踏襲されている。京都で本物の茶を学び、江戸に来て町衆の茶を武家に伝えることは困難なことであったと推測される。しかし、不白は俳諧や紀州等に人脈があり、千家の茶は、次第に広まり全国へと知れ渡ることとなる。不白は、師の

恩に報いるため、「下りもの」として千家の茶の普及に専念している。その門下は、公家や魚河岸の人、関取など幅広い。また如心斎から拝領した嶋臺が伝えられている。

（森田）

江戸の文化の特徴について、四つの項目をあげることができる。①近世都市・江戸の成立②江戸時代の文化③宝暦・天明期の江戸文化④「玉露童女追悼集」にみる「文化社会」などである。「ロバートフォーチュンのみた都市・江戸の景観」にみられる江戸らしさ、化政文化の一般の捉え方、宝暦・天明文化が最も江戸らしい文化である説、「俳諧と茶の湯」から、俳諧のネットワークは茶の湯のサロンでもあり、十八世紀後半こそ近世社会の活発期であった。

（小堀）

不白が「俳諧」とすれば遠州は「和歌」といえる。茶入の歌銘や掛物に見られる。「今の東京に何が残っているのか？」フォーチュンのみた都市が現存していれば。

（川上）

関西のものは上げもの、江戸は下りもの意識は否めない。文政十一年の茶人家譜には三〇四名の門人が記されており、公家や寺院

関係もみられる。不白が造った茶室の変遷からみると黙雷庵、蓮華庵、神田明神内の花月楼と、江戸の町中へと入って行ったことが窺える。

(小堀) 数奇者たちの茶から、大名道具・利休道具・仏教美術、家元制度から流儀の茶が伝えられている。「精神性として、心を繋ぐことが大切」、受け継いだ道具を伝えていく。どの様な時代を経て伝世されて来たのか、大切に心得てじっくり考えてから使用することが大事。

(川上) 不白の画賛で未だに使えない軸がある。父は十得をなかなか着用しなかった。残っているものとして、「心遣い」があるのでは、外国人は日本人の心の中に黄金を見たという。

(田中) 年齢が来ないと、その茶室が使えないということもある。大切にすること。

(小堀) 不白は手造りの茶道具が多いのでは。一般に花入は多いが、茶碗や水指は少ない。

(川上) 伝えていくとともに、数奇者のような楽しみを持ち、造られた道具は自由。心は形を求

め、形は心を求める。道具を含めてのことと思う。

(小堀) 大事なことは、先見性と名残を惜しむこと。

このバランスをとること。昔の想像の世界が今や現実のものとなっている。そのスピードが加速されている。「時を止める、風を止める」先取りと控えめというバランスをとることが日本人は上手であった。利休も織部もフランス感覚があった。今この時代だからこそ、茶の湯の役割が大切。時を止めるそれは唯茶を点てること。

(田中) 「心遣い」は茶の湯の総合性、今回は二つの問題提起について内容の濃いシンポジウムが行えた。



東京例会

(平成十九年七月七日)

「天目台 その赤と黒」

西田宏子

二〇〇四年に「宋元の美」と題して、中国の宋時代の漆器を考える展示を催した。この

や「青磁湯盞台二対 一對無帯、一ヶ破」とあるのがそれで、犀皮は赤く見えるが、朱漆塗の台とは少し異なる。またその他の台も、赤か黒かを明らかにしていない。

我が国の絵画に描かれた台は、天目に必ず添っているが、ここでは台のほうが多かったことが解る。しかも赤台が多く見られる。一方、中国の盞と台とが描かれた宋代の絵画には、盞は盞で重ねられ、黒台も赤台も台だけが重ねられている場合が多い。盞は黒釉のものだけでなく、白磁と思われるものも描かれている。

ここで「赤と黒」の台を何故問題にしたのかというと、鎌倉時代頃に我が国へ請求された台は、朱漆塗台か、朱漆と青漆を塗り分けた台が多かったのではないかと、と思われる。そのため、黒漆塗り台は、朱漆よりも高級感のあるものとして、使われたのではないかと推測したことによる。

中国でも禅林では一般的に朱漆塗台が用いられ、徽宗皇帝筆の文会図などの場面では、黒漆塗台が描かれている。これは、おそらく宋代には、そのような使い分けがあったのではないかと推測されよう。

我が国では、朱漆塗台は、鎌倉時代の絵画

には描かれるが、後に茶の湯の流行のなかで、高い賞翫を集めたのは、黒漆塗台であった。

ここで、結論めいたことを言うことはできないが、この「赤と黒の台」は、道具の展開のなかで、考えてゆくべき問題の一つであることを示した次第である。

### 例会の「案内」

東京例会(会場 五島美術館講堂 午後二時)

日時 七月二十六日(土)

演題 「再考 中興名物」 砂澤裕子氏

演題 「日本における茶の異名について」『広本節用集』を中心に― 高橋忠彦氏

日時 九月二十七日(土)

演題 「唐物香合について3」多比羅菜美子氏

演題 「江戸遺跡から出土する茶の湯道具 ―大名屋敷の発掘調査例を中心に―」 追川吉生氏

日時 十一月二十九日(土)

演題 「古渡り更紗展によせて」 佐藤留美氏

演題 「特集陳列『茶人が好んだデザイン』彦根更紗と景徳鎮」を振り返って―茶陶としての明の五彩・染付の位置づけを

考える― 三笠景子氏

日時 一月三十一日(土)

演題 「貴人と相伴者―茶室編―」 岩田澄子氏

演題 「墨蹟研究」 名児耶明氏

近畿例会(会場 池坊短期大学第一会議室 午後二時)

日時 七月十二日(土)

演題 「近代女子教育における奥田正造が果たした役割について」 布埜千加子氏

演題 「茶の湯のコミュニケーション―天王寺屋津田宗達茶会記の教理的分析―」 津田宗達氏

日時 十一月十五日

演題 「『仏日庵公物目録』と「天目」の由来 再考 ―天目真跡と清拙正澄の墨蹟―」 山田哲也氏

演題 「茶の湯と『学問』―伏見城「学問所記」を中心に―」 矢部誠一郎氏

演題 「田能斎と玄々斎の茶室について」 神谷昇司氏

日時 九月二十六日(金)

演題 「茶の湯と『学問』―伏見城「学問所記」を中心に―」 矢部誠一郎氏

演題 「田能斎と玄々斎の茶室について」 神谷昇司氏

東海例会(会場 名古屋文化短期大学アセンブリ・ホール 午後六時)

日時 十一月二十九日(土) (会場 愛知県  
陶磁資料館本館講堂 午前十時半～  
予定)

演題 (未定) 矢野環氏  
演題 「福建省出土の茶入と伝世の唐物茶入」  
井上喜久男氏

高知例会(会場 高知県立文学館慶雲茶室  
午前十時～)

日時 八月三十一日(日)  
演題 「茶道文献による茶花―花入のこと―」  
日時 十二月七日(日)

演題 「茶の湯の歴史とこれからの茶の湯―茶  
の湯から見た日本の政治、行政―茶事―」  
日時 二月二十二日

演題 「茶の湯と陰陽五行」  
このほか一般の方々茶の湯に親しんでもら  
うための茶席を、毎週日曜日を主体(十時～  
十六時)に設けます。

### 研究会のお申込

同封の案内パンフレットにありますように、  
第二十五回研究会「ベトナム ハノイ・ハロ  
ン湾」(九月四日～八日)が開催されます。

七月十八日(金)が締切となっておりますの  
で、参加ご希望の方はお申込をお急ぎ下さい。  
詳しくは、パンフレットをご覧ください。

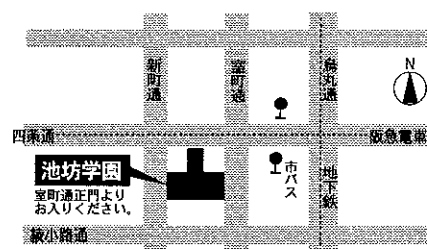
### 会誌の論文募集

当会では現在、会誌『茶の湯文化学』(第  
十六号)に掲載する論文を募集しております。  
投稿を希望される方は、当会事務局に八月末  
日までに原稿をお送り下さい。ふるつての  
応募をお待ちしております。

### 後記

平成二十年度の学会費の納入がまだお済み  
でない方は、ご確認の上、お急ぎお納めくだ  
さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 近畿例会々場 (池坊短期大学)

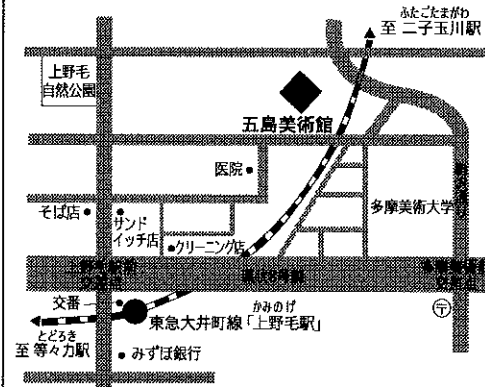


最寄り駅 地下鉄/四条駅/ 阪急/烏丸駅(地上出口26番)  
市バス/烏丸四条

池坊短期大学・池坊文化学院

〒660-8491 京都市下京区四条室町鶏鉾町 ☎0120-87-3852

### 東京例会々場 (五島美術館)



〒158-8510 東京都世田谷区上野毛3-9-25  
ハローダイヤル 03-5777-8600 / テープ案内 03-3703-0661